

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	白董記 : 文苑
Author(s)	ものもふ人
Citation	龍南會雜誌, 120: 53-58
Issue date	1907
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6022
Right	

文苑

白董記

ものもふ人

こよひれてつみてかへらむすみれくさ、

をのくしばふはつゆしげくさも。(千載集)

一

春の夕のあわたゞしきかな。まひるの征矢にさめ出でし梢の花、未だごごごるみもあへぬに、光の晝は世を去らむとすらむ。みくるまの轍の音西に向ひては、御馬の瞳ははてなきわたつみのうしはの華や慕ふ。崇巖なる落日の雄姿暮雲をひらいてゆくこと急あるや、晚鐘ゆるう野を亘りて、その餘韻も遙にかすかあるよと見るまに消はてぬ。ふるさとの山、相向ひてはわれぞはちある身を霞にかくるゝ姿やさしや。ああ、萬里飄遊の孤客、さらでだに滿腔の憂思、滂沱の愁涙、ひとへに夕に向ひてしげきものあるを、今はしも、いで湯の香は暖き矢部河畔のたそがれ、語ろはむ一人の友もなうて、無限の幽情をせめては空ゆく暮雲に托せむの身ぞ。

東にはたてつらねたる高樓巨厦、未だ宵ならざるに弦歌湧くがごと、玉觥花をうけて舞妓が膝によらむは何所のたはれぞ。一すぢの清流はその方よりわが傍をよぎりて遠く西へ西へと流れゆく。

ゆくへはうすもやこめたる廣野の末。酌奕の殘照水をしたうて波光瀲灩、鯉子の躍、たま／＼波紋を乱せども消ね去ること急也。かなたはひらけわたる肥筑一帯のひろぬ、麥秀で／＼五寸、菜の花咲いて已に三日、黃波蒼浪野をたほうて、末はいづれ一帯の霞の奥へと。とみるまに見よ。これや、大聖者が胸にもねそめむ戀の姿、深紅の光ゆるやかに、落日は端山の一角にふれたり。このせつなや、遙に思ふ、大海原のそこ、八重の潮は再び珊瑚の床よりめさめて新しき音に湧き出でむ、夕のとばりは深きふかき地なる母のふところをもれて、我世に暗とあらはれむとすらむ。さばれ、此晚霞を熱して熾烈の至情を藏せしめむすべしらぬ身には此莊嚴の大觀も、たゞ、多恨の胸の大波ひとへにさわがしめむわざありかし。

二

フエネロンがつめたきいましめ——テレマーカーの一冊を手にしつゝ、ひとみは高う、たと／＼へもあき天上の美彩にあこがれ入れる身に、何ものぞ、一脉の清香を送りて小き胸をつかむとするは。これや、かつてはたかき教へ人イザヤにまことの神の姿を顯現せしなよ風。春柔う野の邊の若草を吹いては、わがさかりなる生命の木の葉をひるがへしつゝ、さてはうるめる瞳に何をか示さんとする。このとき何とほくらす胸の高ぶりつねならず。はげしき脈して六藏九竅ことごとく新しき力の固く生くるを覺わつ。ふとかりみるは流のゆくへ、相伴うて霞に入るまで蛭として連れる長堤。堤上の道を遙にゆるうゆるう、ひとりうただれて西ゆく後姿はそも。これや、わだつみの子の群のなか、西ある海の潮の華の。うたかたにあり／＼といふ姿か、柳にかけし琴のねおほさやかにて、九つ

神の宮居をほたそかありし日の、かの聖者にみわしとふ幻か。さてはむかし、白牛の脊に戀の花つみのせてあけぼの白き朝夕の海を渡りし人の俤やこれ。そのふみしたぎ去る若草に新しきのぞみの香あり。かげうつし行く水のものにいよゝてりそふ生命の光あり。つみてはすてつとぞすむ岸邊の白堊に、宿るは戀の輝うすやかの。

三

生れては筑紫のはての名もなき男の子。郷を去りて五とせ、のぞみにはやりては二たび事をあやまり、意氣にくるうては一人の友を死地に陥れむとしつ。谷なる聖をねがへどもとこれ凡夫。大才の子もて任せむとはすれど、詩神の冥寵遂に享けらるべうもみえず。徒に世にすね人をうらみて、僅に、『生命の分擔者』なる一人の友がかひあを力に五尺の形骸を保ちつゝ、生れて廿有三年の春、はじめて温きなよ風の息吹ふかうもむねに泌みぬとぞ覺えし。そここゝにつみすてられたる白堊の、一つ一つとひろひゆくに、これさながら胸に刺るゝ矢じりかそれ。あど、かくはしも、たゞ遠かる姿の、さかりわれにそむいて霞にかくれゆくそのうしろでの、われをくるしめいたましむるや。たもふに此とき、われはわが世にありとも覺えず。苦痛はやがてこれ無限の歡喜也。眼前にかゝげられたる宇宙の壯美はたとふるに夢の如く。かすかなる姿はまぼろしの如きわが夢の國うろしめするじ也。其聲なき命令の野をこゝ海をわたるまゝに、落日の雄姿は一轉又一轉、虞淵のあをみにかくれ入り、夕の風またたねはてゝひろぬはさながら、靜淑太古のごと、あふげば半天の紅蓮くづれては流れ、流れては海のかなた、光の國にとけ入る。やがてはかなたに去りゆくうしろでの、か

すみに消え入りつゝいよゝかすかな。されども、その一息ごとに見よ、我が魂はもぬけてはるかみ空に翔けるべうも覺えられつ。高きには一つづゝきらめき出づる新しき希望の星かげ。

四

あゝさらばわれ、はせ去りて紅うすき霞を分け入り、河畔を南への若草野路に、かのゆかしき影をたはむか。

かくてや、新しき歡樂の泉わかむ。慰藉の香油もにむ。腔裏に満てる憧憬の念のわれをかあたに驅らむとするや、汗にあへげる悍馬の、野にゝて小川を覓むるよりも急なり。ゆかむ、ゆいてかの崇高き純美の生命を其かひなより此腕につたへでやまめや、そのさにつろふ頬のあたゝかみを二の唇にさくらでやまめや。

この一瞬！

北天の一角よりみ聲あり。

曰く。知らずや汝が運命は巨靈の一呼吸にすぎざるをと。

われは覺えず、テレマークの一冊を胸にねさへて、巨靈のみめぐみに感謝しぬ。あゝ、盲目たるものよ、汝の名は人なり。

狂熱奔放のうた人あはかつ歌ひぬ。戀する勿れ少女子よ、戀する時と悲みと、何れか長き何れ短きと。あゝ、佐用姫はかくてこそ石となりけめ、た七はかくて血を流し、清姫はあらゆる苦悶を忍びぬ。かれらは渾然とて宇宙の大調和を形成せる根本の矛盾をさること能はず。渺たる五尺の軀

軀と如電の生命とを以て——巨靈の遠き分派ある一体もて——巨靈の呼吸をさへぎり、進みては乾坤の法則の一字をだに更め得べしと信せりし也。

頭をあげよ、地に俯せよ。天の文、地の象、何物か撞着せる大事實の表象ならざる。たくみは長うして生命の日は短かく、木、静かからむとすれども、風やます。生きては死する日あるべきを、生活慾はやがてまた、その本能たらずや。溪流涓として廣野の慈懷をしたへども、斷巖たえずを妨けて、こゝに激湍の壯美あり。大洋はひとへに平靜を冀へれども、時に、海神の巨鞭これをたういて澎湃の怒濤こゝに狂乱す。至純の戀か、たれかこれをしも富と名に従ふ影とあざけり、あるはしら鳩の巢にのみ見出でねむとは教へし。まことやこれ、我世てふ大海原のうあぞに輝ける眞白玉、さ夜をひそかに天のとごりをしぬび出で、人の子の胸にひそみ入りし星の光かりか。かあはあれ、世にひるのみの春はなう、夜のみの秋もあらじ。渺として五十年、しかもなほ交互の覺醒と睡眠とはやむべからず。さればぞ世のありとあらゆる事業、なべてこれ觀じ來れば戀の仇敵のみ。一切の葛藤こゝに於てか生ず。かつや科學者は生者の大目的をこひて種族の保存をその一に加へざるべからざりき。やがてこゝに墮落の隨伴するを見る。悲惨、殘忍、失望、自殺等あらゆる不祥の文字をみ來らは、たれかその要素として戀愛の存在せるを否定しうべき。うべや凡ての犯罪の裡には女性あり。

あゝ危いかな、汲々乎たり。われは底ひもれぬ深淵をのぞみてたてるなりき。たかきみ聲のさとし、さとしもたかりりかな。その威嚴の前にわが腕はをのゝき、わが胸の血はたぎち、瞳よひた

ぶるに天なる聖座をあふいでは、涕泗頰をつたふること、森の流よりもはやり。かくてぞくしきやねはむやさしの影はふるゝにまよはしの影と變化せむ。

五

ねはむやさしの影は、ふるゝにまよはしの影と變化せむ。たゞひとりはるかにしてのぞむにぞ、これや自然の理想の美。わが胸こゝにのぞみあり、光あり、力あり、六合を貫流してはにつきせぬ眞理に對する愛や、遙遠にして九万里茫々として五千載天半にかゝりて不滅の靈火と現せる星辰に對にしての戀、そのつきせず、汚れざるはまたこれのみ。われは堤を去らむ、去りて夕な夕な、ゆかしうゝるでを夢みてむ。闇ははや四方を領じて、くれのこる瀬々の川なみ音がすかあり。

さらばく、矢部の流よ。西につづく長堤の若草道よ。そこしへにまさきかれ。われはたかきさとしの靈威に服して將に此地を去らむの身ぞ。

あゝ西のかた河畔のかすみに消え入りしやさしの人よ、無限の空間と時代を思ひ浮べば、春の此夕、全じ堤の若草にイむわれらの間、いかでか一すぢのゑにしあからむ。ましてや消えにし幻を思ふたび、わが胸さけむ計りあるを、さるに、その名も問はず、さをも問はず、袖ふく風のごと、いづこよりしていづこにゆくともゝらで、たゞさりげかうわかれたる此身か。せめてはひろひ蒐めし白すみれの花いくつ、よしや、くぼみて、その香は失せ色はあせむとも、われはそこへにこそ秘めむ。花さく朝もる夕、抱いてその日の影や忍ばむ。願はくばわが俤の人、世に此身あるをつゆめめむ宵はあくも、たゞさはひ花と其かうべにさき乱れよ。

(四十年四月六日稿)